

長崎開港史

—家船の陸上がりの視点から—

On the opening of the port city of NAGASAKI
—From a point of view of EBUNE's people living on the small boat, going ashore—

安野真幸*

Masaki ANNO

(1998. 9. 30受理)

要旨：長崎開港前の長崎周辺のありさまを、当地に伝えられた神功皇后伝説から考えると、当地は船住まい (=家船) の人々の活躍する世界であったことがわかる。彼らは潜水漁業を行う専業漁民であるが、同時に水軍や倭寇とも関連があり、海運業・商業への転身もあったと思われる。南蛮貿易港には「舳」などの形で水上交通・荷役業を行う「キリシタン家船」の存在が想定され、長崎の開港は彼らの陸上がりの結果なのである。

キーワード：家船 (エブネ)、漂海民、陸上がり、神功皇后伝説、長崎、キリシタン家船

目次

- 1 長崎の地形
- 2 神功皇后の伝説
- 3 船住まいの人々
- 4 キリシタンの家船
- 5 長崎の開港

1 長崎の地形

長崎県

今の長崎県は律令時代で云えば「壱岐・対馬」の二島、二国と「肥前」の西半分からなり、江戸時代では天領「長崎」の他に「島原藩・大村藩・平戸藩・福江藩・対馬藩」などからなっていた。その地形はもっぱら海と島、湾と半島から構成され、県の海岸線の総延長は4,000 kmを超え、北海道全体の海岸線を上回ると云う。島嶼には現在、人の住む島80, 無人島490がある。長崎市を中心とする県南には「長崎半島・西彼杵半島・島原半島」と「長崎湾・大村湾・橘湾」があり、この三つの半島を含み「有明海」と「大村湾」で区切られる世界を「肥前半島」と云

* 弘前大学教育学部社会科教室 Department of Social Studies, Faculty of Education,
Hirosaki University

う。他方、県北の「伊万里湾」と「佐世保湾」で区切られる半島は「北松浦半島」である。

五島列島や野母岬から発見された縄文前期の遺跡では、曾畑式土器の包含層が海水面とほぼ同じか、あるいはマイナスであることから、今からおよそ五千年前にこの地方を中心に九州一帯で大規模な海水面の上昇があったと考古学者たちは想定している¹⁾。長い海岸線や複雑な地形は、陸地が海に沈み、山並みの尾根だけが陸地として残り、海が谷まで押し寄せて来た結果なのである。それゆえこの「リアス式海岸」は断崖と磯から構成され、海水浴場のある白浜と松林からなる遠浅の海岸とは対極をなしている。その特徴は①・山が海にまで迫り農業可能な平地が極端に少ないこと、②・断崖が海に迫り海岸沿いに道は通ぜず、交通はもっぱら「船」に頼ったこと、などである。

長崎県最大の平野は干拓で有名な「諫早平野」で、次が壱岐の島の平野部だと云う。この他に大村湾東岸の郡川の作る「大村平野」などがあろう。近県の「筑紫平野」や「佐賀平野・熊本平野」等々と比べると、長崎県の特徴は平野部が極端に少なく、山が海にまで迫り「山」と「島」からなる「山島」の世界であることとなろう。九州西北部の海岸を構成している長崎県のこの多島海世界は、もっと大きなスケールで捉えると、東シナ海の東北部を構成していることになる。この環東シナ海世界全体がモンスーン地帯に属し、夏の暑さが亜熱帯並なことから、ここは全体として照葉樹林帯に属し、開発前の山々は鬱蒼と茂る暗い照葉樹林や竹林で覆われていた。

長崎市内の寺院境内には、今も楠の大木を見かけるが、これは元々この地に自生していたもので、かつてここには楠・椿・椎・櫨などの照葉樹が鬱蒼と茂っていた。『魏誌倭人伝』には対島・壱岐両国には良田が少なく、人々は「南北に市糶」したとあるが、水田稲作農業に適さない分だけ「山」では林業・狩猟・牧畜等々が、「海」では漁業・運送業・商業などが盛んであった。鉱業としては近代では炭鉱が有名だが、平安から鎌倉にかけては、西彼杵半島の「滑石」を原料に作られた「石鍋²⁾」が地域の特産品で、西日本はもとより、遠く沖縄にまで輸出されていた。また長崎県から少しはずれるが、伊万里市郊外の腰岳の黒曜石は縄文時代の特産物であった。

長崎市とその周辺

長崎市周辺の地形や景観を考えてみたい。そこで鳥となって大空高く舞い上がり、波止場から「長崎湾」の入口方面を眺めて行きたい。右手には三菱造船の大きなドックと停泊中の船が見えるが、湾の入口の先には東洋一を誇る「香焼島」の巨大ドックが見えてくる。この香焼島に続くのが「伊王島」で、その先は「東シナ海」、その先さらに遠くは中国大陸である。浦上方面に方向を転ずると、浦上川に沿って長く伸びた「浦上」平野が見えてくる。そのまま低い山を越えると「大村湾」に面した「時津」に至る。この低地を「浦上・時津地溝帯」と言い、浦上平野の西方には「稻佐山・岩屋山」の山々が連なり、この山々はさらに「西彼杵半島」へと続いている。

岩屋山山頂で一休みして、ここから四方を眺めると、南には「伊王島」「香焼島」さらにその奥には炭鉱で有名な「高島」が見え、その手前には長崎湾と東シナ海を結ぶ海が広がっている。東南方向の長崎湾は「稻佐山」の山並みが隠しているが、大浦のスカイタワーや大波止などの長崎港が見える。また長崎の市街地の先に、山の鞍部を越えて「橘湾」が見え、天気が好ければ雲仙普賢岳の溶岩ドームも見えると云う。北には時津港から「大村湾」が、西には「東シナ

海」が見え、晴れた日には「五島列島」が見えると云う。五島列島は「福江島」から東北方向に「久賀島・奈留島・若松島・中通島」と並び、その延長線上、西彼杵半島に隠れる所に「平戸島」があるはずである。

東方の市街地化した浦上平野の先には、「天狗山・金比羅山」の山並みが次第に高度を下げながら、やがて「長崎湾」に沈んで行くのが見える。この沈む辺りが今も昔も長崎港の「波止場」である。長崎開港時の古い地形を考えると、当時「崇岳」と呼ばれた「金比羅山」の山並みに続く小高い「岬」が海に突き出した姿が想定される。断崖を巡らした「長い岬」が海に突き出した形から、ここは「長崎」と呼ばれ、地名の起源となったのだと私は思う。この「岬」の西側の海は深く、今も昔も遠洋航海の船が碇を下ろしている。「岬」の地は現在では県庁や裁判所・銀行などの建ち並ぶオフィス街となっているが、都市長崎の歴史の舞台となったところである。

地図で長崎湾の南方を見ると、東シナ海にアンテナのように「長崎半島」が張出している。この長い長崎半島を尾根筋とすると、長崎湾はこれに並行する谷筋に当たっている。一方、前述の「浦上・時津地溝帯」はこの半島と湾に対して左に45度ほど傾いている。長崎の地がこの「地溝帯」によって「大村湾」と結び付いていることは大切である。一方浦上川を下り、河口から海を越えてさらに直進すると、長崎の町を横断して銅座川の河口に出る。この川をさかのぼると、田上峠を経て「橘湾」に面した「茂木港」に至る一本道となる。これが「浦上・時津地溝帯」に連続する「茂木地溝帯」で、この地溝帯によって長崎は「橘湾」とも連絡しているのである。

長崎は九州本体と陸路では「諫早」を経由してつながっているが、この山越えの道は不便で、むしろ長崎半島を横切り、「茂木港」経由で、長崎から海路「島原」や「有明海」沿岸に出るか、「時津」経由で海路「大村」に出る方が便利だった。つまり長崎は「浦上・時津地溝帯」や「茂木地溝帯」によって長崎湾と大村湾・橘湾の三つの湾を互いに結び付ける交通の要衝に当たっているのである。今長崎が県南の中心都市として、県北の中心都市、佐世保と相対立しているが、その原因には江戸時代以来の都市長崎の存在も考えられるが、他方、地形によっている面も大きいのである。

それゆえ都市長崎の歴史は、一般には「ポルトガル船の来航により南蛮貿易港として長崎は開港された」「この時から長崎の歴史は始まる」として説明されるが、地形的な特徴から、さらにそれ以前から、この地には県南地域の交易の中心地としてのそれなりの歴史があったことが想像されるのである。

サンバンセン

浜崎国男氏の『長崎異人街誌³⁾』によれば、今「グラバー亭」や「大浦天主堂」などのある観光地長崎のメッカ＝大浦は、江戸時代には大村氏の所領で「戸町村大浦郷」と呼ばれた「湾」で、五島・天草地方などからの廻船が多数往来する船津として賑わっていた。この大浦は安政の開国後公領となり、大浦川の北側は「東山手」、南側は「南山手」の外国人居留地となり、大浦湾は埋め立てられて北側は「海岸通り」、南側は「下り松」となったが、明治時代になってもここは「サンバン船」と呼ばれた「はしけ」や「ヒャアハチ・ハイハチ」と呼ばれた「船売女」の溜りであったという。港町にはどこでも泊まり船を巡り船人を相手にした女性たちがいたのである。

こうした「はしけ」や「船売女」は水上生活者「家船」の変形とも考えられ興味深い。明治・

大正期の湾内交通は乗客を四、五人乗せて走る「サンパン船」によったが、南から順に波ノ平・大浦川・大浦海岸・大波止・浦上川・稻佐の各波止場には一千艘以上があったと云う。長崎の「サンパン」は「中国から伝来したもの」とされているが、中国古来の「三板」とは形態が多少異なっていると云う。現代の交通は道路・自動車・ガソリン・大気汚染・環境破壊という悪循環の中にあるが、以前は、水上交通という環境にやさしい交通手段があったのである。私たちはボチボチ海や水に背を向けた生活を改める時期に来ているのではあるまいか。

2 神功皇后の伝説

二つの地溝帯と神功皇后伝説

長崎近郊の「浦上・時津地溝帯」「茂木地溝帯」に沿って、人々は太古の昔から歩き続けており、その道が「浦上街道」「茂木街道」となった。この想像を一層確かにするのが、ここを「神功皇后」が通ったとする「皇后の三韓征伐」にまつわる地名譚・伝説の存在である。正確に云えば、この地方の神功皇后に関わる地名譚をつなぎ合わせていくと、神功皇后は新羅征伐出陣の折、まず時津に上陸して「浦上街道」を長崎にいたり、そこから船で平戸に至った。凱旋の折にはまず茂木にいたり、そこから「茂木街道」を長崎に向かったとなるのである。この神功皇后の地名譚・伝説は江戸時代に作られた『長崎名所図絵⁹⁾』に記されている。

「神功皇后の三韓征伐」は、古くは『古事記』や『日本書紀』『肥前国風土記』などに記されており、中でも『風土記』「松浦郡」の記録が有名である。神意を問う「うけい」としての釣の物語や郡名の由来譚、また同郡の風俗の記録、同郡内の「逢鹿駅・登望駅」の名前の由来譚等々がある。ところで『風土記』「彼杵郡周賀郷」の部には、岩の縁起譚と郷名の起源譚の二つがあり、これらは長崎周辺の地名譚・伝説を理解する上で注目すべきものである。後者の郷名の起源譚は、アマが潜水した時の息つかい「鬱比表」にちなんで名付けられた「鬱比表麻呂」という名前の「土蜘蛛」=海民が神功皇后一行を救ったとの物語である。

前者の岩の縁起譚は、海中から突き出た岩にまつわる物語で、神功皇后が新羅征伐の際船を繋いだ杭が岩になったと云う。この岩の場所の比定について『日本古典文学大系⁹⁾』校注には「長崎港口の小島、またはその北方の外海村沖の大角力・小角力の岩礁に擬する説があるが郷の東北と記している方位にあわない。郷の東北にあたる海は大村湾の南西隅で、後藤説には二つの磯を時津港の北方の黒島・二島に擬している。従うべきか」とある。いずれの説を採るにせよ、神功皇后は新羅征伐の際、肥前国彼杵郡を通ったことになり、『長崎名所図絵』に記された神功皇后が長崎周辺を通ったとする地名譚・伝説との間に密接な関係が認められる。

「周賀郷」がどこかも問題である。これについても校注者の立場は一貫していて、「遺称なく所在地不明。大村湾の南西岸地方か」とある。一方瀬野清一郎氏は、『長崎県の歴史⁶⁾』において、この「周賀郷」を西彼杵半島の「雪浦辺り」に比定している。竹内理三氏は『長崎県史⁷⁾』において、彼杵郡の「郡の西南にあり」の記述から「長崎半島辺り」としている。海から陸をみる竹内氏の見方に立てば、長崎半島から見て「東北の海」となれば「長崎港口の小島」説や「大角力・小角力の岩礁」説は十分に意味を持つと思われる。以上から『長崎名所図絵』所収の地名譚・伝説の背景には『肥前国風土記』が大きな影を投げかけていることがわかる。

以上の解釈として、『風土記』を読んだ江戸時代の知識人が平田国学などの影響下に、長崎周辺の地名譚・伝説を作り上げたとも考えられる。幕末から明治にかけて国学が盛んになるにつ

れ、神功皇后伝説も再評価されたことは確かであろう。しかしだからと云って、神功皇后伝説が幕末に新たに創造されたとするは出来ず、『長崎名所図絵』の編集はそれなりの古い由緒に基づいていると考えられよう。また中世「家船」の人々など海民の生活圏と、伝説上の「神功皇后」の行動半径が重なることから、長崎湾から平戸に至る海の道や「浦上街道・茂木街道」を活躍の舞台とした「家船」の人々が、「神功皇后」の伝承を持ち運んだとも考えられよう。

家船と共同幻想

前述「周賀郷」の伝承の担い手は当然「鬱比表麻呂」を先祖とする海民である。中世松浦が「家船」の根拠地で、『風土記』には漁業に係る風俗伝承が存在することから『風土記』のほかの部分の伝承の担い手も、「家船」の先祖の海民だと考えられる。ここから『長崎名所図絵』にある長崎周辺の地名譚・伝説の担い手も同じ海民と想像される。こうした地名譚・伝説を解く鍵は、社会的なマイノリティーである彼らが、多数派住民に対し自らをどう説明しようとしたのかにあると思われる。「浮き鯛系図」を持ち歩き神功皇后との強い結び付きを主張した瀬戸内の能地系家船⁸⁾の人々と同様、肥前瀬戸家船の直接の先祖たちもまた、多数派住民の「共同幻想」に訴えて、自らの正統性の獲得に努めたのであろう。

例えば『長崎名所図絵』には深堀の西の「祝島」は「硫黄島」とも云うことから、この島は「俊寛僧都配流の地」だとして「俊寛僧都之墓」もあると記している。この伝承の背景には「平曲」を語る琵琶法師の活躍があろう。同様に「祝島」の先の「皇后島・高鉾島」など「神功皇后」にまつわる伝承の背後にも、これらの伝承の担い手である「家船」の人々の活躍を考えてよいのではあるまいか。この地方の「家船」の人々が「能地系家船」の人々と同様、神功皇后との強い結び付きを主張したことから、彼らは「能地系家船」の分かれか否かを問う系譜論よりも、これらの伝承の背後に同じ「共同幻想」が存在していた中世日本と云うもののあり方にこそ、私は注目すべきだと思う。

家船の人々の問題としては、日本社会内部の社会的なマイノリティの面のみならず、環東シナ海世界におけるマージナルマンとしての面も考えるべきであろう。彼らが日本の多数派の共同幻想の中心である皇室の神話、中でも神功皇后の物語に強く引き付けられたのは、現実生活の点で常に国境を越える可能性を持ち、日本人であると同時に済州島人でも、中国人でも韓国人でもありうると云う「あいまいな存在」で、所属意識が不安定な分だけ、逆に周辺の人々との間に大きな緊張を抱えていたからであろう。この他、海民としての「女神」信仰も大きく関わっていたと思われる。「女神」信仰に限れば、彼らはキリスト教を契機に神功皇后から聖母マリアへと信仰の対象を変えたと思われる。

長崎周辺の地名譚

『長崎名所図絵』に記された、神功皇后に関連する伝承・地名譚は、①浦上地区のもの、②茂木のもの、③湾口のもの三つに整理することができる。それぞれについてもう少し詳しく見てゆこう。①の浦上地区については、この地に残る言い伝えに「神功皇后が新羅征伐の折り筑紫の海を船出して、時津の浦に上陸し浦上を経て、長崎の港にしばらく滞在した」とあることから確かめることができる。時津八幡神社は神功皇后を祭っている。浦上村山里には神功皇后が通ったとき飲んだ水を「神功井（ジングウガワ）」、水鏡に見た井戸を「鏡井（ガミガワ）」と云い、山里村の本原石神の「角ヶ崎火打石」を「神功皇后の鎮懐石」とするとある。

民俗学の野口武徳氏によれば、家船の人々が陸上からの補給を必要としたものに「水・薪」があり、そのための井戸を「家船井戸（エブネガワ）」、山を「家船山（エブネヤマ）」と云うとある。海からの上陸地点近くの「神功井」や「鏡井」はこの「家船井戸」に当たろう。さらに皇后は浦上の「浜口」（昔はここまで海であった）と「平の宿」の間の「神功皇后腰掛石」に座り、武内宿禰に命じて稻佐岳の北、淵村亀焼の立岩、屏風峰に登って四方を見させたので、その立岩を「立岩権現」と云い武内宿禰を祀っているとある。この「立岩権現」も焚き木を採った「家船山」かも知れない。幕末に、この鎮懐石の所在地に浦上村の庄屋の高谷氏が社を立てたのが「稚桜神社⁹⁾」である。

野口氏は家船の女は陸上の各部落ごとに三、四軒の得意先を持ち、物々交換（カキエ）を行っていたとしているが、『長崎名所図絵』では「神功皇后腰掛石」につき「腰掛石の傍らは皆田圃になっているが、石の近く二十間ほどは空地である。この内に畠を作ってはならない。不浄を置けば皆水になってしまうと、里人は恐れをなしている」とあり、この石には「不浄」のものを置いてはならないとのタブーと、石の上に置いたものが水に変化したことを伝えている。この伝承の背後にはこの場所が家船の人々と里の人々との交易「無言市」の場であったことがあるのかもしれない。以上から①の背後には、その昔家船の人々が大村湾や長崎湾で採った魚と浦上平野の人々の農作物などを交換していたことが想定されよう。

「角ヶ崎火打石」を「神功皇后の鎮懐石」とすることや「腰掛石」のように神功皇后が「石」と関係が深いことにも注目すべきであろう。近世には、この火打石は「唐土の雲南石に異ならず」とて人々が価高く買いつつと云う。西彼杵半島の特産品である「滑石」は獣の皮のなめしのほか、湯タンポ代わりに身体を温めるのに使い、また「石鍋」の原料にもなった。肥後の国では「滑石」と神功皇后の関係が確かめられる¹⁰⁾。これら「鎮懐石・腰掛石」は日本各地にあり、長崎もその一つなのである。各地にこうした観念を持ち運んだ人々が存在することは確実に、その背後に海民の「石」に対する信仰や海民が「火打石」などの「石の交易」に関係していたことが想定されよう。

さらに『長崎名所図絵』によれば、③の長崎の湾から湾口の島々の名前は神功皇后が名付けたものとある。皇后は長崎浦の旧名「深江の浦」から諸臣を諸方に派遣したが、八武小麿と大矢田宿禰は途中で死亡したので社祠を建てて祀った。それが「茂木」の「八武者権現」と「矢上」の「大王権現」である。「八武者権現」は小麿一人を祀ったとあるが、八人の臣を祀る社もある。皇后が「深江の浦」から船出をし、海山の風光明媚を賞されて「重浪（シキナミ）寄する堅国の玉の浦」と云ったので、この浦の名前は「玉の浦」となったと云う。また湾口西側の岬は神を祀るによい場所だとして船魂猿田彦、住吉の二柱を祀ったのが「神崎社」で、ここには「鎮懐石」と「漢委奴国王の黄金印」が珍宝として伝えられていたとある。

さらに「瓊矛（トボコ）に似ている」といったので「高鉾島」、船をつないだ島が「皇后島」、皇后手づから櫓に鈴をつけ、高くさしあげて天神地祇を拝した島が「神の島」、新羅征討軍が夜もすがら船出をことほぎ祝った「伊王島（祝う島）」、竜神に捧げる神楽を演奏させたのが見聞沖の「神楽島」と云う。この「鉾」とは魚を突いて取るための漁具で、その使い手として「家船」の人々が想定されることに注目すべきであろう。ともあれ③は、この地で大規模な水上の祭りがあったことの反映と考えられ、この地方がかつて「石鍋」の生産地として大いに繁栄し、多くの交易船がこの地を行き来していたことと関係しているように思われる。

その後神功皇后の乗った船は平戸島に進んだが、そこで臣の一人が亡くなったので「七郎権

現」社に祀ったとして、平戸の「七郎権現」の縁起としている。以上の伝承を結べば、神功皇后は大村湾の時津に上陸し、浦上を経て長崎の浦に至り、次にはそこを船出して長崎湾の入り口で様々な祭りを行った後、「西彼杵半島」に添って北上して平戸島に至り、そこから朝鮮半島に進んだとなる。順序が前後したが、②の「茂木」については、前述の「八武小磨」の言い伝えでは「茂木街道」を長崎から茂木に進んだとあるが、他方、茂木村の古老の言い伝えとして、逆に皇后は茂木に上陸し、ここから長崎に進んだとある。

すなわち、神功皇后が三韓征伐の帰途、この浦に船を入れて上陸すると、川上の方から青菜が流れてきたので「青菜の浦・もみ菜の浦」と名づけた。村口の「八武者権現社」に祀ってある八人の武臣が、狭い所に夜具を同じくして一夜を過ごしたので「群着の浦」と呼んだが、のちに訛って「茂木浦」となった。この浦から田上峠に至る途中、今は「よれそ」と云う「鎧初」は皇后凱旋のお祝いに鎧を着揃えた所。そこから少し行った「陣の尾」は皇后が暫く陣をして休んだ所である。それから玉の浦（長崎）に入り、遂に筑前国に到達したという。以上の伝承からは、倭寇など水軍・海賊衆として活躍した武装した「家船」集団の上陸・行軍をしのんでもよいだろう。

3 船住まいの人々

「家船」の屯集地

「東シナ海」に面した西九州の「南蛮貿易港」の中で、島津領以外の港を北から順に挙げると、「平戸」「横瀬浦」「福田」「長崎」「口の津」「志岐」となる。南蛮貿易の始まる直前の「後期倭寇」の時代、日中間の私貿易の中心地は「平戸」であった。この平戸に代わる南蛮貿易港として大村氏とイエズス会が新たに開港したのが「横瀬浦」（現・西海町）である。この港は昭和に「西海大橋」ができるまで、長く「陸の孤島」と呼ばれていた西彼杵半島北端の入江にある。この横瀬浦の前に広がる海は「佐世保湾」で、大村湾と佐世保湾は「針尾瀬戸」で結ばれている。それゆえ横瀬浦の港は干潮・満潮の時には流れの激しい潮流の影響を受けている。

一般に流れの激しい瀬戸は、潜水漁業を専門とするアマたちの活躍の舞台で、1562(永禄5)年10月25日付けダルメイダ書簡¹¹⁾には「(横瀬浦の)江内に多くの漁夫あり、其の妻子と共に海上に生活し夜は江内に来たりて眠る。従って此の地は魚類の供給豊富なり」とあり、ここ横瀬浦は〈舟を以て家となす〉「家船＝エブネ」の溜り、屯集地であった。西彼杵半島の北部から「平戸島」にかけての海は、南の「角力灘」と比べ大変島数の多い多島海で「九十九島」と云い、つい最近まで「家船」の人々の活躍の舞台であった。彼らは小家族ごとに小船を住居にして生活し、主に潜水漁業を行い、海産物を採り販売もしくは農産物と物々交換していた。

民俗学の羽原又吉氏は『漂海民¹²⁾』の中で大村藩『郷村記』を引き、江戸時代には「九十九島」の南端、西彼杵半島西部中央の「大瀬戸町」やその対岸「蛎ノ浦島・崎戸島」には「肥前瀬戸家船」と呼ばれた〈船を住家とする海上生活者〉の大屯集地があり、彼らは大村藩から保護を受けており、一方、平戸の北の「幸の浦」にも松浦藩から保護を受けた家船の屯集地があったとしている。彼らは共に長崎貿易の代表的な輸出品「俵物」の原料となる「ナマコ」漁を行っていた。「肥前瀬戸家船」や「幸の浦家船」の前身は網野善彦氏が「下人・所従的海民」と名付けた中世「西北九州の海夫¹³⁾」で、ダルメイダの見た「横瀬浦の家船」はこの両者をつなぐものであるだろう。

網野氏によれば、彼ら「海夫」は「松浦党」の武士に強く隷属し、領主たちの売買・譲与の対象となり、船を持ってはいるが、領主からは「党・一類」として捉えられ「船党」とも呼ばれていたとある。彼らは「松浦党」の根拠地「宇野御厨」の、東は伊万里から西は五島列島にまで分布するほか、「長崎半島」戸町浦の深堀氏の所料内や肥後国にも確認できることから、中世においては「長崎半島」やそれ以南のもっと広い範囲をも生活圏としていたことになる。この中世「海夫」の世界が前章で確認した神功皇后伝説の伝承地、①長崎湾の周辺、②彼杵半島に沿って平戸に北上する海の道、③橘湾の周辺と重なる事実は注目に値しよう。

以上から、九州西部の南蛮貿易港「平戸・横瀬浦・福田・長崎・口の津・志岐」が、いずれも「家船」の活躍した世界に属していたことになる。羽原氏は同書で、蛸ノ浦島・崎戸島の家船は大瀬戸町の「肥前瀬戸家船」の分かれで、枝村の形成は近世後期とし、明治の末年には長崎湾内の「小ヶ倉」や対馬・五島などにも枝村を作ったとしている。対馬では巖原近郊の「曲」が彼らの作った集落だという。先に述べた長崎の「サンパン」の前身にも「肥前瀬戸家船」を挙げることができよう。このように「家船」の人々は枝村を作っては拡大していったことから、逆に東南アジアから東シナ海の沿岸部で生活する漂海民たちは皆同一系統に属しているとの考えも生まれてくる。

民俗学の宮本常一氏は、日本の漁民を「半農半漁」や「男漁女耕」のタイプで陸上がりをするものと、家船などの漁撈専門のタイプに分け、二系統の漁民を想定している¹⁴⁾。現在の学問状況は、日本民族＝米作民族という柳田国男以来の通説の克服に関心があり、当然非稲作民としての漁民に関心は集まってはいるものの、漁民のことは十分に明らかになっていない。中世の漂海民「家船」のあり方は、一面では非稲作民＝非常民として、一種カースト的なマイノリティ・グループを形成しながら、他面「海夫」として「松浦党」の武士などに強く隷属していたと考えられよう。ところで、横瀬浦より西彼杵半島に沿って南下すると、長崎の西、稲佐山の山影に、断崖絶壁に囲まれた港町「福田」に出る。

1568年6月28日に福田港に着いたパードレ・アレキサンドレ・バルレツジョの書簡¹⁵⁾には「私たちが最初に着いた所は、ドン・バルトロメの領である福田という港でした。港に錨をおろす前にも、町の人々は私たちを見て、すぐたくさんの船に乗って私たちのナウにやってきました。その船は信者の船でしたので、各船は非常に美しい十字架の旗を立てていました。それを見ると私たちは非常に慰められました」とある。ここから、福田では船は生活必需品で、一家に船が必ず一、二艘あったと考えられる。海を相手にする生活とは「船」による生活を意味しているが、この当時福田の人々は船住まいとしての「家船」ではなく、陸上がりして「陸上の家屋」に住んでいたことになる。

家船と倭寇

中世において壱岐・対馬の両国と松浦の上・下二郡は、朝鮮より「倭寇」の根拠地として「三島」と呼ばれていた。この「三島」の世界は、網野氏の言う「西北九州の海夫」の世界を含み、さらにその北方には、朝鮮半島の西南部の多島海から済州島にかけての海域世界が展開している。今でこそ長崎県は日本国の西の外れで、海をへだてて大韓民国と相對しているが、中世においては、この二つの世界の間で住民相互間の交流は盛んで、むしろ「倭寇世界」として統一して捉えるべきだとさえ云われている。その共通性の決め手が「船をもって家となす」海民や「倭語」の存在である。ここに前述した船住まい人々の帰属意識のあいまいさの現実的な根拠

があるわけである。

高橋公明氏¹⁶⁾は十四、五世紀の対馬の漁民は対馬の宗氏側からも、朝鮮側からも「船を以て家となす」と表現されていたことを明らかにされた。一方対馬の郷土史家の永留久恵氏¹⁷⁾は、「海つきの村では山つきの者を《山家者》と呼んだが、「浜の者を差別的にみる伝統が根づいていた」ことから「山家者は浜の者を《海船党》と呼んだとしている。この《海船党》と云う言い方は、網野氏が「西北九州の海夫」を紹介した際の史料にある「船党」との関連がたどれそうで興味深い。もしもこの想像が成り立つのなら、現在の対馬漁民の多くは陸上がりした中世「家船」の末裔で、倭寇の根拠地とされた「三島」は同時に「家船」の根拠地と考えられよう。

さらに高橋氏は、朝鮮側史料にある三浦の乱後朝鮮に投降した日本人「平時羅＝平次郎カ」の供述には「常に妻子を船中に載せ、賊をなすをもって事となす」「加延助機＝カイゾク」が「博多等の島にちらばっている」とある。この海上生活者「加延助機」を「倭之別種」「面黒髪黄、言語服飾諸倭に異なる」として、朝鮮側は差別的に表現しているが、他方青い服を着て倭語を語り、倭寇のメンバーともなった半島の住む「水賊」の人々は、実は濟州島の漁民であったとしている。つまり、朝鮮当局は農本主義的な秩序観から、国の内外を問わず、秩序に反する人々を皆差別して、「倭寇」として一括して捉えていたと云うのである。

氏はさらに中国から東南アジアの沿岸や河川で用いられる小船 sampan について考察している。この言葉の語源には、中国語起源説と東南アジア言語起源説があり、辞書の多くは前者に傾いているが、氏は後者が正しいだろうとし、さらに季氏朝鮮は船足の早い倭寇の倭船に対抗するために、頑丈な在来の漕船・兵船に代わる小型船開発のため、濟州船・唐船・琉球船・倭船などを研究し、機動力の点で在来の漁民の用いてきた小型船「三板船(サムパンソン)」「鼻居刀船(ビゴトソン)」で水軍に編成したとし、また『改訂綜合日本民俗語彙』から、三板船の構造は「名称から推定すると、日本の周防大島のサンマイ、大三島のサンマイズクリと近似したもの」と想像している。

以上明治以前の大浦湾などにも多く見られた「三板船」という船の名前が広く各地に存在することから、狭く舟山列島から福建・広東に至る中国東南の海岸地帯や中国人の出かけた東南アジア世界のみならず、「倭寇世界」と云われる東シナ海を取り巻く「西北九州の海域世界」「南西朝鮮の海域世界」「舟山列島から福建・広東に至る海域世界」の三者の基層的な一体性の可能性が出て来るのである。もしも氏の推測が成立すると、中世の東アジアの海域世界では、国境の観念は成立せず、中国人と日本人と朝鮮人が彼我の区別なく雑居していたとする「倭寇的世界」が船の点からも実証されたことになりそうである。

となると、近世から近代の始めにかけて北西九州の「肥前瀬戸家船」「幸の浦家船」や瀬戸内の「能地漁民」として現れる家船漁民は、中世では、上・下松浦郡から壱岐・対馬を中心に、東は瀬戸内海、南は九州の西海岸にまでと、はるかに広い範囲で分布をしていたことになる。さらにもっと古い時代にさかのぼれば、彼らが「黥面文身ス」「好ンデ沈没シテ魚蛤ヲ捕ウ」と云われた「倭人」に結び付き、広く東シナ海を活躍の舞台としていた「倭」「越」の海民の姿と一致するとも考えられる。それゆえ「倭寇」とは、「倭」と云う呼び名自身が古い時代のものである以上に、古代「倭人」の世界を中世の時点で再現したものとも思われる。

『蕉軒日録¹⁸⁾』には「九州ノ人ハ船中ニテ過一生」とあり、「1586年の日本年報¹⁹⁾」には「筑前の海岸にそうて博多を過ぎ、諸島の間に出た時、これまでかつて見たこともないものを見た。

われらの乗っていた船の付近に六、七艘の小さい漁舟があったが、この舟は漁夫の家となり妻子・犬猫・食物・衣類および履物その他、家財一切をのせ各船には唯一人船尾にすわって櫂を頭上に漕いでいた」とある。パードレ、クエリヨは鐘ヶ崎から瀬戸内海にかけての海域で「家船」の集団と行きあったのである。中世においてはこのような「舟を以て家となす」人々は多かったと思われる。

農業社会との交易と分業

民俗学の野口武徳氏の研究「海上漂白漁民の陸地定着過程²⁰⁾」によると、海上生活をする「肥前瀬戸家船」の人々は「半農半漁」という形で陸上がりをするのではなく、陸上の農業社会を前提とし、彼らと交易・分業という形で対応していたと云う。それゆえ陸上で農業を営む人々もまた、たとえ目の前で魚が泳いでいても魚を取ることはせず、漁業はもっぱら彼らに任せ、棲み分けを貫き、「家船」の人々は陸上で農業を営む人々を「得意＝トクイ」として交易の相手に持ち、「各部落毎に一艘の船について少なくとも三、四軒で「中でも特に親しくつきあってくれる家を家船たちはくいとこ（親類）とさえ呼んで親しくしていた」とある。

彼らは同時に、根拠地となるフナダマリには「宿＝ヤド」を持ち「一艘の船は必ず一軒のヤドをもっていた」としている。野口氏はさらに続けて「通常フナダマリのある港で、倉の一つも持っている比較的裕福な家がヤドになるのであり、一軒の宿は幾艘か複数の船の宿をかねていた」とし、家船は宿に①「衣類」、②鉾の柄にする「竹」を預け、逆に宿から③「風呂」、④「正月の餅つきの道具」などを借りた、としている。野口氏の研究は彼らについてのフィールドワークに基づいている。ここで明らかとなった彼らと「トクイ」先との交易は、陸上の成熟した農業社会を前提としていることから、このような交易関係は江戸時代にまで遡らせることが出来よう。

しかし例えば中世前期においては、農業社会は未成熟で、農民は在地領主の行なう種子・農料の下行等に大きく依存し、定住生活は不安定な状況にあった。とすれば、これに対応して「家船」の人々の生活もまた、「トクイ」先との交易にではなく、むしろ「幾艘か複数の船の宿をかねていた」「倉を持ったヤド」の方により多く依存していたと考えられよう。さらに海上生活と云っても、水や薪はどうしても陸地に依存しており、水は日本列島内では豊富なことから、たとえ彼らが自由に利用できる井戸などの設備はあったと仮定しても、彼らが焚き木として利用できる山は「船木山」と云い、それを所有する領主に彼らの生活は多く支配されていたことになる。

そうなると中世の「ヤド」は、家船の人々の衣類や道具類の保管よりは、むしろ収穫物の販売や保存加工のための集荷問屋的な性格を持った「廻船問屋」であった可能性がある。宮本常一氏は『町のなりたち』の「社会保障」の章²¹⁾で、水田稲作に適さない山村、僻地、漁村などには商業的な活躍をする「土豪」がおり、彼らが配下の人々を強く支配しているのは、生活保障の一つのやり方だったとしている。「家船」の人々が非稲作民＝非常民でありながら、同時に「海夫」として「松浦党」の武士に強く隷属していた理由にはこのようなことが考えられよう。それゆえ横瀬浦が「家船」の屯集地だったとすれば、横瀬浦の領主は同時に家船の「ヤド」であったと想像される。

4 キリシタンの家船

中世の家船と水軍

先に明らかにしたように、九州西部の南蛮貿易港である「平戸・横瀬浦・福田・長崎・口の津・志岐」は、いずれも中世家船の活躍した世界の中にあった。横瀬浦が「家船」の屯集地であったことが南蛮貿易港開港の条件だったとすれば、大層興味あるところである。なぜなら、南蛮屏風絵などから明らかなように、当時ポルトガルの黒船は港の沖合に停泊し、そこから小船を下ろしたり「舢舨」に乗り換えて上陸・陸揚げするのが常で、その小船には「家船」が当たっていた可能性があるからである。羽原氏は『漂海民』の中で、東京や大阪の水上生活者「セジ船」の存在を挙げ、港湾都市の発達と共に「家船」が水上運搬業・荷役業・渡船業に転身するとしている。

宮本氏もまた『海に生きる人びと²²⁾』の中で「海人の陸上がり」と商船の発生」「家船の商船化」を取上げ、漁業から商業への転身を論じている。ここから、南蛮船の入港地はどこでも、水上運搬・荷役業者としての「家船」がついてまわったと考えてよいのではあるまいか。1566（永禄九）年3月17日付けのダルメイダ書簡²³⁾には、戦国期の太田領内の「家船」集団の在り方を知る手掛かりとして、次のようにある。「当地の風聞に依れば、ドン・ベルトラメウ（太田純忠）は瀬戸および雪の浦に於いて叛起したる者に対して兵士を派遣せしが、彼らは他の者と共に一城に集まりたればドン・ベルトラメウはこれを囲み船二十五艘を奪ひたる由なり。平戸よりは彼らを救うため船十艘を派遣せしが其の爲したる所に付きては未だ報道を得ず。」

ここでは太田氏への反逆者たちは「船」を持ちながら「籠城」している。「瀬戸・雪の浦」の地名から、反乱を起こしたものと「肥前瀬戸家船」との強い結び付きが考えられる。後述するように、家船＝水軍と等置可能とすれば、我々はこの記録から、瀬戸の水軍が永禄九年には平戸松浦氏の側に組して太田純忠に敵対していた事実を知ることになる。一方網野氏は、家船の人々は「武士に所属した海夫」すなわち水軍の船頭として武士に従っていただけで、家船＝水軍と等置出来ないとしている。この網野説が正しいと仮定しても、この書簡から、水軍の構成員である「船頭と船の奪い合い」という戦いの世界を想定することができよう。

木島甚久氏は『日本漁業史論考²⁴⁾』で古代・中世の海軍・水軍を論じた際、家船を「海士の裔なり」とし、「社会分化の著しくない時代には漁民即ち海軍・海士であった」としている。この見解は網野説とは異なっているが、現在のところ中世水軍についての通説である。宮本氏は『海に生きる人々』において、江戸時代になって「家船」の集団が捕鯨業に従うようになると、夫婦と子供という単婚小家族で船に乗るあり方を改め、集団編成の仕方を変え、男女の分業を進め、男はリーダーの下でクジラ組の鯨漁集団を組織し、女は残って潜水作業を続けたとある。「家船」集団の水軍への転化もまた、この「鯨漁」の場合とよく似ていたであろう。

谷川健一氏も「家船」の集団は「平時」には磯や瀬で伝統的な漁業を続け、カースト的な内婚制をとるマイノリティ・グループであるが、秩序の解体した「戦時」には、統率する首長の下に掟を守って行動する「軍事集団」の面が強く表れるとし、次の三例をあげている²⁵⁾。①・中国の水上生活者「蛋民」が「倭寇」に加わり、軍事行動に優れた能力を発揮したこと。②・「肥前家船」には太田氏に加勢して合戦に参加したとの伝承が伝えられていること。③・鎖国後の1647（正保四）年ポルトガル船の長崎来航に対して長崎警護のため「肥前家船」が動員されたこと。なお「肥前瀬戸家船」集団の成立は近世太田藩成立後のことであろう。

キリシタンの家船

地理的な条件を考慮すれば、大村氏の領内、特に「西彼杵半島」周辺の港の中で、国際貿易港としての条件を備えた港としては、浪静かな湾内の港「長崎」が注目されるに至るのは当然と思われる。しかし地理的な条件がいかにかに優れていても、「長崎開港」には、人々の織りなすそれなりの歴史が必要であった。1562年にイエズス会と大村氏との契約により、横瀬浦が開港になったにもかかわらず、翌年この港は焼討ちにあい、右の「ポルトガル船来航表」にあるように、母港を失ったポルトガル船は入港先を次々に平戸・口ノ津・福田などに変えながら、長崎港発見に至るのであるが、その間の事情はフロイス『日本史』を要約すると²⁶⁾、次のようになる。

「日本の布教長のパードレのコスメ・デ・トルレスはパードレのベルショール・デ・フィゲイレドを福田に派遣しそこに定住するよう命じた。その理由は①・マカオから定航船でやってきたポルトガル人たちに説教をし、告白を聞くため。②・福田にいる日本人のキリシタンの世話をするためである。フィゲイレドは水先案内人をつれて大村領内の安全な港をさがし、水深を測量して長崎港の発見に至った。そこで大村氏との協議を行い長崎の開港・町の建設へととなった。」

①、②は共にキリスト教徒に対する司牧者の務めである。ところで、②の「福田の日本人キリシタン」が長崎の町の建設主体であったことに関しては、次のような説明がある。

(i) 彼らはポルトガルの定航船が行く先々の港について行って、その港にかなり立派な住居を建てていた。

(ii) 定航船の援護のもとに家族連れで住居を設けていたキリシタンたちは、その長崎に決定的で確乎とした定住地を建設しはじめた。

(iii) これらキリシタンたちのうち多くはいろいろな地方から追われてきた人々で、ある者は主君から追放され、ある者は信仰を棄てたくないために自ら郷里を出たのであり、また別の者は戦いのために郷里が破壊されてしまって、そこから遠く離れたところに住むようになったのである。これらの人々のある者は島原から、また別の者は、志岐、五島、平戸、山口、博多、その他種々の国から来ていた。

(i) には「彼らはポルトガルの定航船が行く先々の港について行っ」たとあることから、「福田のキリシタン」たちは貿易港が変わるたびに、ポルトガルの定航船の行く先々の港を家族連れで漂白していたことになる。それゆえ彼らには船上生活者としての側面があることから、彼らを「キリシタン家船」と呼ぶことが許されよう。前述したように、南蛮貿易には幕末長崎の「サンパン船」のように、水上運搬業に転身した「家船」の存在が必要不可欠であったとすれば、彼ら「キリシタン家船」には、こうした人々を含んでいた可能性を否定できないのである。となると、(i) の「かなり立派な住居」とはどのようなものであったのかが次に問題となる。

ポルトガル船来航表 (1563—1570)

岡本良知²⁷⁾及び岩生成一²⁸⁾より、

*は岩生の数値

	平戸	横瀬浦	福田	口之津	志岐
1563		3 *2			
1564	3				
1565			2		
1566			1		
1567				3 *1	
1568			1		
1569			1	*3	
1570			1		2

「福田のキリシタン」たちは本来の「家船」の人々＝漁師でなく、(ii)のように「確乎とした定住地」を求めて「陸上がり」の指向性を強く持っていたが、貿易港が変わるたびに、平戸・口の津・志岐などの港に「住居を建てていた」のであるから、「かなり立派な住居」とは云え、それは当然「仮の小屋」であったはずである。フロイスが述べているのは、その「小屋」が「仮」のわりには「かなり立派」だということであろう。以上から彼ら「福田のキリシタン」たちは陸上での「小屋住まい」に向けて強い指向性を持ちながら、同時に「家船」の境遇に陥り、「定航船の援護のもとにあった」事実も否定できないのである。

この「キリシタン家船」の人々は、フロイスの云うとおりとすれば「神の子羊」のごとく「平和な」人々となるが、戦国の世を生きぬく彼らは十分に武装していたと思われる。その証明のために、1565年の「福田沖の海戦」を取り上げたい。

福田沖の海戦

1565年平戸の領主松浦鎮信はポルトガルの定期航海船が以前のように平戸に入港しなくなったことに怒り、定航船を捕獲して一挙に富を手に入れる目的で「絹の買い付けに来た堺の商人」と獲物の山分けを約束し、共に福田に停泊中の定航船を襲うこととし、大村領の福田に向け「堺の商人の持つ8艘ないし10艘の大船」と共に「松浦氏の有する最も優れた戦士たちの乗った70艘の小船」からなる武装船隊を組織し、これを福田に派遣した。この平戸の武装船隊は、堺の商人たちが取引の不首尾を見て海賊に早変わりし、これに海の領主松浦氏の水軍・海賊衆が加わったものであることから、日本国内向けの「倭寇」と云うことができよう。

戸田芳実氏は「中世南海の水軍領主²⁹⁾」において、村上水軍の伝えた「合武三島流船戦要法」から、「大船」は人数・兵具・兵糧を多く積む点では有利だが、合戦になると操船が不自由な点に欠陥があり、それに対し「小船」は自由に船を操り、敵船におしよせ乗るとのみに有利としている。それゆえ小船の集団によって構成された「松浦氏の有する最も優れた」水軍が「海士としての家船の集団」であった可能性は否定できないのである。福田に向かった「平戸の武装船隊」はポルトガルの定航船を捕獲するために、横瀬浦の焼き討ちの場合と同様、まず南蛮船や中国船の母港福田港を襲い焼き討ちにする作戦で、福田沖におしかけたと思われる。

これに対して福田沖でこれと対戦したのは、フロイスの言い分では、インドから来航したカピタン・モールのドン・ジョアン・ペレイラの定航船とマラッカの司令官ドン・ディオゴ・デ・メネーゼスの小型ガレオン船のみとなり、平戸側は定航船を乗っ取るうとして乗り込んだが、ガレオン船の砲弾が日本人の船によく命中したので、彼らは三艘の大型船を撃破され、80人の戦死者・120人以上の死傷者を出して退却したとなる。フロイスが「戦闘が定航船の上甲板と舷側できわめて激しくなされている間に、日本人たちは大胆不敵にも船尾の廊下に侵入して総司令官の船室まで進み、そこで彼の事務机を奪った」と述べていることに注目すべきであろう。

定航船の側の損害は死者八人・負傷者数人で、総司令官ドン・ジョアン・ペレイラの被っていた兜が銃撃を受けて凹んだとある。しかし福田側にも南蛮船以外にも「平戸の武装船隊」に対応する武装船隊が存在したのである。この合戦に関係する「福田文書³⁰⁾」は155号、156号の二つがある。大村純忠の「書状」(155号)には「今度至南蛮船兵船乗懸候、就其別而被入性候故、岡不被上立候事、奇特、中々不及是非候」とあり、平戸の兵船が南蛮船に乗り懸ったとき、福田氏の側が立派な軍功を挙げたので、平戸側は上陸することができなかつたと、福田の武装船隊の活躍を記している。また156号文書は次のような大村純忠の「書状」である。

音問祝着候、仍今度之平戸船仕合之儀、中々不及是非候、去りとてハ南蛮衆奇特之振舞無申事候、特其方心懸を以、兵船岡ニ不被上立候事、神変之儀、他所之覚と申大慶候、弥其表無緩頼存候、柁も同然申候、恐々謹言

九月廿六日

福田左京亮殿

純忠

御返事

「南蛮衆」の働きを「奇特之振舞無申事候」とあることから、フロイスの云うポルトガル人側の目覚ましい活躍が確かめられる。一方、福田側にも「平戸の武装船隊」に対応する「福田・柁」の武装船隊や「博多や豊後から絹を買い付けに来た商人たちの大型船」の存在が考えられる。このほかポルトガルの定航船の行く先々の港を漂白していた「キリシタン家船」が「平戸の武装船隊」とよく似た構成をなしていたとすれば、彼らもまた平戸の兵船の上陸を阻止するなどの戦をしたのではあるまいか。

5 長崎の開港

長崎の町の建設について、フロイスは一方では、福田の「キリシタンの家船」集団の陸上がりの結果としながら、他方 (iii) では、福田のキリシタン以外の人々を「島原から、また別の者は志岐、五島、平戸、山口、博多その他種々の国から来ていた」としている。しかし日本側の記録には、最初にできた六丁町のうち「大村町」は大村氏が、「島原町」は有馬氏が建てたとあるのに続いて、「平戸町は日の浦与左衛門が之を建て、横瀬浦・外浦の二町は横瀬浦与五左衛門を乙名とした³¹⁾」とある。横瀬浦の集団はフロイスの言う「戦いのために郷里が破壊されてしまった」ものに、平戸の集団は「信仰を棄てたくないために自ら郷里を出た」か、「主君から追放された」に相当しよう。

それゆえ「キリシタンの家船」の集団は、もともとは「日の浦与左衛門」と「横瀬浦与五左衛門」という武士的な名乗りを持つ二人の首長に率いられた平戸領内と大村領内の集団からなり、後者はさらに横瀬浦と外浦の二つの集団からなっていたと想像される。横瀬浦のキリシタンは、横瀬浦でポルトガル人のための船宿の町「上町・下町」を構成していた人々の可能性もあるが、横瀬浦と外浦を溜りとする「キリシタン家船」の集団であった可能性も否定できない。「家船」集団とすれば、彼ら「横瀬浦と外浦を溜りとする家船の集団」が「福田のキリシタン家船」に加わり、さらには長崎の町の建設の中心となったところに、南蛮貿易港の歴史があるとなろう。

また集団を率いた日の浦与左衛門と横瀬浦与五左衛門の二人は「家船」のメンバーではなく、むしろ船溜りの浦にある「宿」の主人の可能性が高く、横瀬浦与五左衛門は当然「横瀬浦」とかかわりを持ち、日の浦与左衛門もまた、平戸島の対岸、北松浦半島の平戸の瀬戸に面した「日の浦」にかかわりのある領主と思われる。一方、六丁町の「外浦町」がどこの出身者たちの町かについては議論があり、古賀十二郎氏は「大村郊外の地名」としている³²⁾が、むしろ「外浦」は普通名詞で、横瀬浦以外の「福田」「柁 (=式見)」などの「そのほかの浦」か、あるいは「福田文書³³⁾」に「外海」辺りを「外浦」と呼んでいる文書があるので、「西彼杵半島の西海岸」を指す当時の固有名詞と考えたい。

『長崎根元記』³⁴⁾には「長崎町開基並南蛮船初て長崎に来事」と題して、次のようにある。

「南蛮船天文の比より永祿十二年までは、大隅の内種子島、豊後又は福田、横瀬浦など云所に着船して、其所々にて商売をなす。然共蛮夷心に応ずる湊なし、然處に長崎の湊海底深く、三方山高して、難風凌能第一の湊なりと見立、元龜元年に始て長崎に着船す。因茲上方並諸国の商人仮屋を建商売す。其比今の内町は大村の領主大村民部入道理專領地也。就夫理專家来友長対馬と云者を指越、《蛮夷ども末々までも、此地へ於令着岸は可取立》由にて、則元龜二年に町割をなし、国々より集まる所の名によせて、其集まる所の者は一所に置、或は豊後町・大村町、或は平戸町、或は五島町などと名付、町之頭人を定。(以下略)」

括弧内は記録文全体の文体と異なり純漢文体であるが、これは大村純忠の家来友長対馬が、町割奉行として都市長崎の建設を始めるに際して、公布した内町建設への協力要請文を元に行っているからであろう。「蛮夷ども末々までも」とあるから「黒船で来航するポルトガル人やその縁者であるキリシタンたち」に対して「今後此の地に船を着岸させるなら、取立てよう」と約束している。これまでの我々の考察が認められるなら、この要請に答えて内町の「平戸町・横瀬浦町・外浦町」を建設したのが「福田のキリシタン」と呼ばれた人たちで、かつての南蛮貿易港であった平戸や横瀬浦などで南蛮貿易に関わりを持った人たちとなろう。

注

- (1) 下川達弥「考古学からみた海人文化」(『東シナ海と西海文化』『海と列島文化4』小学館 1992年 所収)、前田保夫「縄文海進と水没遺跡」(『海と文明』『講座文明と環境10』朝倉書店 1995年 所収)
- (2) 下川達弥「西北九州の石鍋とその伝播」(『東シナ海と西海文化』『海と列島文化4』小学館 1992年 所収)、「生活を変えた職人たち 石鍋」(『中世の風景を読む7』『東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社 1995年 所収)
- (3) 浜崎国男『長崎異人街誌』葦書房 1978年 初版 1994年 再版
- (4) 『長崎文献叢書 第一集第三巻』長崎文献社 1974年
- (5) 『日本古典文学体系 2』『風土記』岩波書店 1958年 408頁
- (6) 山川出版社 1972年
- (7) 『長崎県史—古代・中世編』(1980年 吉川弘文館) 第二章 記紀風土記の世界 51頁
- (8) 小川徹太郎「浮鯛抄物語」(『内海に躍動する海の民』『中世の風景を読む 6』新人物往来社 1995年 所収)
- (9) 『長崎市史・地誌編・名所旧跡部』1937年 初版 1981年 複製版
- (10) 井上辰雄『熊本県の歴史』山川出版社 1972年
- (11) 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信 上』(『新異国叢書1』雄松堂 1968年) 291頁
- (12) 羽原又吉『漂海民』岩波新書 1963年
- (13) 網野義彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店 1984年
- (14) 宮本常一『日本文化の形成』そしえて 1981年
- (15) 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信 下』(『新異国叢書2』雄松堂 1969年) 160頁
- (16) 「中世東アジア海域における海民と交流—濟州島を中心として—」名古屋大学文学部 研究論集「史学」No.33 1987年、「中世の海域世界と濟州島」(『東シナ海と西海文化』『海と列島文化4』小学館 1992年 所収)
- (17) 永留久恵『海神と天神—対馬の風土と神々—』白水社 1988年
- (18) 『大日本古記録』岩波書店
- (19) 村上直次郎訳『イエズス会日本年報 下』(『新異国叢書4』雄松堂 1969年) 141頁
- (20) 『日本民俗文化資料集成 3』『漂海民』三一書房 1992年
- (21) 宮本常一『町のなりたち』『日本民衆史 5』未来社 1968年 112頁

- (22) 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信 下』（『新異国叢書 2』 雄松堂 1969年）49頁
- (23) 『日本漁業史論考』 誠美書閣 1944年（『日本民俗文化資料集成 3』『漂海民一家船と糸満』 三一書房 1992年 再録）
- (24) 『日本民衆史 3』 未来社 1964年
- (25) 『漂海民一家船と糸満』（『日本民俗文化資料集成 3』 三一書房 1992年）「序」, 『古代海人の世界』 小学館 1995年 「松浦海賊の出自」
- (26) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史 9』 中央公論社 1979年 第二十四章
- (27) 岡本良知『増訂版 十六世紀日欧交通史の研究』 1942年 六甲書店
- (28) 岩生成一「近世初期の対外関係」 岩波講座 日本歴史 1934年
- (29) 『初期中世社会史の研究』 東京大学出版会 1991年
- (30) 外山幹夫『中世九州社会史の研究』 吉川弘文館 1986年 所収 「付録」
- (31) 「長崎縁起略記」『続々群書類従 地理部』
- (32) 古賀十二郎翁遺稿刊行会『長崎開港史』 1657年
- (33) 146, 147, 162号文書 前注(32)参照。
- (34) 新村 出編『海表叢書』 巻 4 平楽寺書店 1928年